

〈史料紹介〉

「(仮題) 元治元年八月学林所化上書」

— 西本願寺学林における「外学」受容の一齣 —

小林 健太

一、はじめに

今回紹介する史料は、本願寺史料研究所に保管されている、表紙に「上」とのみ記された仮綴じの冊子である。寸法は縦二七・三センチメートル、横二〇・二センチメートルで、七丁。内容から判断すると、学林所化が西本願寺（以下、本願寺）に対して提出した建言書である。「元治元年八月学林所化上書」と仮に題しておく。

本願寺が、幕末期に宗学の他に「外学」を積極的に修得しようとしていたことは、拙稿を含めた先行研究で示されている¹⁾。

その本願寺の僧侶養成機関である学林では、真宗学（宗乗）・仏教学（余乗）を中心とした学問が講じられて

いた。しかし、近世の後期になると、儒学・国学の立場から排仏論が主張されるようになり、それに対応するために僧侶も儒学や国学などの「外学」を学ぶことが求められたのであった。

学林における「外学」受容の過程を大まかに記しておく。その端緒となったのは、天保二年（一八三一）に、国学などの「外典」を学林の蔵書として購入したい旨を学林看護から本願寺へ願い出たことであるといえる。その後、天保七年に僧侶の学階昇進の試験においても、「外学」が採用されることとなった。

得業選

（中略）

一兼学試 一日

兼学分而五科とす。一他学科、二国学科兼和歌、三儒学科兼詩文、四曆術科、五書学科。…又国学・儒学ハ題を与へ、和歌・詩文章を作らしめ、或ハ国書・儒書の要節を研討すへし。曆術科の如きハ其時ニ応じて日月行度、或ハ歳差等の論に及ふへし。

(中略)

一宗乘・他部・国学・儒学・曆術・書学之内、其一業ニ熟練之道心篤実之者ハ、可挙得業。但し余之一業ニ長し候共、宗学ニ未熟之者ハ選之限ニあらず…

当時の学階には、上から勸学・司教・助教・得業があった。この昇階試験には、学林で「饗試」が行われ、その後、本願寺で行われる「殿試」に合格してはじめて昇階が認められるのである。饗試には正学試・兼学試の二科目があり、兼学試は他学・国学・儒学・曆術・書学のうちから選択するようになっていた。このようなかたちで、学林の登科制度に「外学」が取り入れられたのであったが、その内容は、儒学は詩作をさせ、国学は題をもとに和歌を詠む題詠や国書の要節について答えさせるなどとしていた。

しかし、排仏論の主張が激しいものになるにつれ、本願寺も正面から対応せざるを得なくなった。

甲子安居以来再三之建白雖有之、対無捩訳柄且時勢不被及御沙汰候得共、以来於林門、外学取交破邪顕正可致、就而者正兼外之三学策進有之、嚴護法城可致旨被仰出之

但、国学外典、又者神書天文外学等、都而仮二可用勸学寮候事

辰二月^③

この史料は、慶応四年（一八六八）二月に、本願寺から学林へ出された達書である。この史料によつて、所化らが本願寺に対して、再三「外学」を学習する必要があることを建言しており、慶応四年になつてようやく本願寺が「外学」の修得を許可したことがわかる。

学林の看護・参事が筆記した事務日誌『学林万檢』は、元治元年の記録が欠落しており、当時の様子を窺い知ることが出来ない。つまり、従来は『嚴護録』に記されていた、「甲子安居以来再三之建白」という部分からしか、元治元年に所化らが学林に対して「外学」の講座を設置するように建白したということがわからなかったのである。そして、その建白が、どのような内容であつ

たかも知られてはいなかった。ただ、後述するように、この建白書がその「甲子安居以来再三之建白」の初見史料ではないことが惜しまれるのであるが、初めての建白を承けて、今回紹介する建白があるということになる。以上のことから、本史料を紹介する意義はあると考える。

ここで、少し本史料の内容を解説しておきたい。元治元年（一八六四）に西本願寺は火災を受けてその多くの施設を失った。学林も講堂・寮舎を失うこととなった。

このような状況で、防火活動にあたった学林所化もいたようである。しかし、町中が大混乱であったという。所化らは、学林を再建するにあたって、平田篤胤ら国学者の排仏論に対応するための方策を建言した。具体的には、「儒学館・他学館・宗学館」を設け、全国から有能な人材を集めることで排仏論に対抗しようとしたのである。文久三年（一八六三）に勸学南溪が、破仏の状況に対応するよう本山に建白したのを皮切りに、その後何度か学林所化らによって本山への建言がなされていたが、本史料を見る限り、本山はそれらに対応していなかったといえるであろう。

【註】

（1）『龍谷大学三百五十年史』通史編上、二〇〇〇年。拙稿「幕末維新期における西本願寺の危機意識—学林の改革と皇学講師法蓮の思想に注目して—」『龍谷日本史研究』三九、二〇一六年。拙稿「幕末期西本願寺学林における「外学」受容とその展開—梵曆の研究を中心として—」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』三九、二〇一七年。

（2）留役所『学林諸記』天保七年六月九日条、『龍谷大学史報』十三、龍谷大学大宮図書館（大学史資料室）、二〇一三年、一—二頁。

（3）『嚴護録』、『龍谷大学三百五十年史』史料編三、一九九〇年、九六頁。

（4）拙稿「幕末期西本願寺教団の動向と学林—本山改革の言上書の分析を通して—」『日本宗教文化史研究』二〇（二）、二〇一六年。

【凡例】

一、「〔仮題〕元治元年八月学林所化上書」は本願寺史料研究所保管文書である。

一、原本の形態を可能な限り残すようにつとめたが、読みやすくするため句読点・並列点を付したり、改行した箇所もある。

一、原本に使用されている古体・異体・略体等の文字

は、原則として正体もしくは現在通用の字体に改めたが、固有名詞や字体の甚だしく異なるものなどは原本の字体を存した場合もある。また、者(は)、江(え・へ)、茂(も)、而(て)、与(と)、𠂔(より)、々(くりかえし)など、使用頻度の高い変体かな・俗字・合字体等はそのまま残した。

一、原本採用の闕字・抬頭等は採用しなかった。

一、原本の明らかな誤字は当該文字の右に()を付し、校訂字句または校訂記号を傍註した。また欠損文字は□などで示した。

一、史料の「者・而・茂・与・江」は、活字ポイントを下げた。

(表紙)

上

奉願口上之覚

一裏方之儀者、亦復此度も焼失に及候処、当御殿之儀者、何等之御厚運ニ被為有御座候哉。外御構筋に至迄御別条不被為在、尚学林におゐても講堂寮舎者焼失仕候得共、林門至要たる経藏之儀者別条無之段、一同如何計歟難有奉恐賀候。然に当度之儀者兵災に而尋常不成事に候得者、十九日之朝廷之処者、遠方之回祿とハ乍申、屋番壹兩人留置其余林門一同御殿へ駄付ケ先御経藏等取片附ケ、相繼而御真影之供奉仕、翌廿日迄於大谷御守衛申上居候得共、火之手八方に相分れ何分にも御殿迄可推及火勢に相成候故、御救火之ため壮年之所化共御殿之方江馳遣し、直様鼓樓近辺之町屋数軒解き崩し

候。然ル処、右鼓楼近辺之屋立と申中にも、大和屋嘉兵衛宅之儀者、奥行且裏屋之処鼓楼之北裏口、尚十二日講話所挑灯講話所江咫尺計りに隣接いたし、其上挑灯講話所之納屋、十二日講話所之庇之如きハ甚古き拔葺に而、^{（火）}頃之照統きに候得者烟草之吸殻程之火にても誤火とも可相成危き場所柄迄、細二氣を附ケ叩摧き救火者二も幾倍いたし候程之働きに及、右鼓楼近辺之屋数大小拾軒余取除ケ、危急之御場所御救申上候処より此御類焼被為御遁候得者、此度之御類焼御遁之儀者、全学林所化共之御防火予備之骨折に而御座候。尤其砌所化計り二而余人立合不申と申訳二而者無御座候得共、最初大谷より駈付ケ候砌に者、鼓楼前に町奉行兩人而已に而余人者一人も寄附不申故、鼓楼近辺往来之者僧侶士分之隔無く、御内之人と見受候へハ、見当り次第欲及拔刀ニも勢を示して差迫まり而遮り留め候故、其勢に被化追々輻湊いたし候得者、たとひ所化之外に余人何程相集り候とも其本に引戻し候ハ、皆所化共防火心切之働に而可在之。左候得者如何之言上に候得共、此度之御類焼御遁に付而者何様之預御重賞候とも不苦次第二而御座候者、就右近世有志之輩宿望之次第懇願仕度、其仔細ハ近頃一兩年之処に至り、別而仏道を憎

ミ徒四方に峰起いたし、是迄之憎仏之所業とハ百倍烈鋪相成、仏堂を焼、仏像を毀ち、銅像を鑄潰し、僧兵に托して令還俗、尚平田篤胤余流之学風大に相行れ、庄官・村役人・町役人迄が仏法ハ真に虚誕無益と信用いたし候様之著述頻に上木、四方に相弘め候折柄二候得者、先達而同上置候通り、儒学館・他学館・宗学館之別を分ち学林之旧弊一洗いたし、夏間たりとも五百七百之所化相集り拔群之人材諸国へ相起り右憎仏之患難を相防ぎ候様に仕度、然ル処、是迄之寮舎に而ハ十分相取候とも二百余に不滿事故、右之大挙に就而者寮舎取広ケ不申者^{（脱々）}而者、事被相行難申儀に付、幸ひ此度類焼之折柄二候也ハ、学林町之地面外町江移替之相談被致候人家も可有之。就右五六百余之所化住居被致候様之寮舎之地面、此度所化共御防火之為御賞美拝領被仰付度奉願上候。右者近年有志一同之懇願二候。既に纔少数人数之所化サへも、屹度此度之防火之御用ニも相立、尚御真影之御守衛も申上候処、況此上五百七百之所化、夏中・夏間貫き徹して御膝許へ詰合候ハ、斯非常之御時柄ニ而兵難等御守衛之御手当ニも可相成候間、何卒懇願之趣意御聞濟被成下度奉願候。右者所化共之懇願ニハ候得共、其旨帰する処全く御殿

之御為筋二而、毫も所化之私望二而者無御座候。則所
化共懇願之趣意相立、学林御改則二相成、五百七百之
所化詰合候様二相成候ハ、自然二近国者勿論、遠国
辺鄙之端々迄僧侶之意得方行蹟迄も相改まり、正義よ
り御取持等も仕様二相成候得者、近世之邪謀^{ヤマツ}子不正之
徒、今年ありて明年不統体之私慾之言上筋と事易り
て、実々永続可仕大確策二候得者、其辺之意味深く御
汲取り被成下、宜鋪御執成之程奉希候。已上。

元治元甲子年

八月

学林所化惣代

耆年惣代

佛乘（花押）

陞圓（花押）

上座惣代

宗淵（花押）

大證（花押）

藹滴惣代

鵬翼（花押）

瑞雲（花押）

僧宣（花押）

御本山

御役人中様

前書之通り銘々之懇願二御座候間、何卒御聞濟被成下度
奉願上候。已上。

鳳雲（花押）

介石（花押）

勸学惣代

善讓（花押）

司教惣代

寛寧（花押）

峻嶺（花押）